

母校の美術品紹介

「城」 竹内 清 (昭和5年卒)



水墨表現を主とした中に、わずかに樹木の緑などの透明水彩絵具による色味を加え、軽快なタッチで烏城を描いている。作者竹内清(1911-2008)は、重厚な色調による抽象的な油彩画の印象が強いが、本図のような水墨画にも鋭い表現力がみとれる。滲み加減を活かした面的な部分と、所々に引かれた鋭い線とが交錯して、リズムカルな効果を生んでいる。本図は校誌『烏城』141号〔創立百十周年記念特集号、昭和60(1985)年〕の表紙[Ⓐ]として制作されたもの。同誌107号の表紙となった烏城の図(竹内作[Ⓑ])を転用しようと検討されていたが、竹内は141号のために新たに本図を描き下ろしたと伝わる。

竹内は岡山市に生まれ、昭和5(1930)年岡山一中を卒業。一中時代に池田遥邨に学んでいる。京都高等工芸学校(現京都工芸繊維大学)に入学する。7年二科展初入選。9年卒業したのち、天満屋に勤務しながら小林喜一郎の赤坂洋画研究所に学ぶ。戦後も二科会を中心に作品を発表しながら、デザイナーとしても活動し、ポスターなどを手がけた。

(昭和55年卒 中村麻里子) ※

<※:元岡山県立美術館学芸員、現在ふくやま美術館(福山市)学芸課勤務>



Ⓐ

Ⓑ

令和4年(2022年)10月4日から11月6日まで、岡山県立美術館にて「岡山の美術展 特別企画〔竹内清展〕」を開催中。

「支那服を着た女」 松島 白虹 (大正5年卒)

はかなげな瞳で木蓮を見つめる女。その横顔は赤い線で縁取られている[Ⓒ]。澄んだ空気の中、色彩豊かな花の髪飾りをこちら向けて、女は「どう?きれいでしょ」とどこか誇らしげである。全体は落ち着いた色調だが、支那服の細部に目を向けると色鮮やかな文様の数々に息を呑む。服の濃紺部分には二匹の蝶が舞い、靴のつま先でも鮮やかに羽を広げている[Ⓓ]。

描いたのは松島白虹(まつしまはっこう)<1885-1937>。大正5年(1916)に岡山中学を卒業、東京美術学校(現東京藝術大学)日本画科に入学、後に女子美術学校教授となった。大正11年(1921)平和記念東京博覧会で褒賞を受けるなど画壇で活躍するも昭和12年(1937)に41歳の若さで惜しくも病没した。

この作品には2つのエピソードがある。

①発見

80周年記念行事として建築予定であった記念館のために寄贈して欲しいとの求めに応じて頂いたものの、記念館の計画は白紙に戻ってしまった。飾られるべき壁面を失った本作品は旧六高書庫の東館と西館の間の僅かな空間に保管され、長い年月を重ねるうちに忘れられていた。

昭和49年(1974)に100周年を迎えたが、これだけの歴史を持つ学校に「校史」がないことに危機感を覚えた後神俊文先生らが、校内に残る史料を捜しまくっておられた中で昭和50年に発見された。

②修復

発見後、長きに渡って応接室に飾られていたが、その間に色彩が大きく変わってしまった。140周年記念で学校が製作した所蔵作品集では[Ⓔ]の写真で紹介されている。平成27年に記念事業の一つとして約40年間の痛みが修復され[Ⓕ]のように元の姿を取り戻した。貴重な作品の維持における修復の大切さを雄弁に物語っている。

(昭和54年卒 磯本 馨)



Ⓒ



Ⓓ



Ⓔ



Ⓕ